が最初に明快に述べられてあるのは以上の態度から出たものである。之が先づ論ぜられるのは如何にも自然である樣に思はれるが從來餘り明かに論ぜられてゐない樣である。「動機論」「規範論」及「國民道德及個人思想」と章を追ふて進むのも如何にも學研的方法である。能くある樣に德目の起原及發展の叙述に追はれることなく是等は「動機論」以下の章下に納められてある。

檢討的態度であると云ふならば然らば全然冷かな乾燥な第三者の觀察なりやと云ふに我が國民道德の長所美點を認むること甚だ鋭く動機篇の如き德の十分な體得によつて始めて著し得られると思はれる。隨所に現はるゝ散文詩とも見るべき說述法は又讀む者を魅する力がある。東京小石川櫻木町六北文館、菊版三四九頁、定價金參圓、(尾生光三郎)

バークレー人知の原理及對話

文學士　善浪逵童譯

本書はバークレーの主著二篇『人知の原理に關する論文』(A treatise concerning the Principles of human knowledge)及「ハイラスとフイロノウスとの三つの對話」(Three dialogues between Hylas and Philonous)の譯である。カント：認識論の目的の一つが、ヒユームの懷疑論によつて其立場を喪ひ去らうとした數學及純粹自然科學をば救護して、其確實性を闡明すると同時に、其基礎をも明かにするにあつたことは周知の事實である。かくてコペルニカス的轉回の洗禮に淨化せられて以來、形而上學としての素朴實在論は認識論上の模寫說と共に其廢殘の姿を哲學の領域より沒し去るの止むなきに到つたことも亦周知の事實である。

今斯くのごとき時代劃成の事業を導出せしめた主なる原因が、經驗論の破產にあつたと認めるならば、經驗論をして必然的に其catastrophyを招來せしめたバークレーの觀念論が、假令其世界觀としてのSpiritualismに矛盾があるとは謂へ、譯者自ら妙じくも其自序に於て述べられて居る如く、何人も其のカントとの間に「共通な問題」を横へてゐることを許さなければならぬ。此の意味に於て既にカントの「序說」及「第二批判」やフイヒテの「知識學序說及基礎」等のクラシツクが譯せなれた今日、當然なさるべくして未だせられなかつたバークレーの紹介が善浪學士の努力に依つて遂に鮮明に且つ周到に成し遂げられたことを自分は非常に多とするものである。

學士は「譯者序說」に於て明晰にバークレーの根本思想を概說批評し其史的旨趣を明にせられてゐる。而して毫もすれば彼の觀念論即ち內在論が獨我論として一概に主觀的なる形容詞のもとに蔽はれることに疑惑を有し、其餘りに早計なることを一々バークレー自らの言葉に基いて證明せんと努められてゐる。事實、ヴヰンデルバントの說くごとく獨我論とは卽ちder theoretische Egoismusの謂であると解する時バークレーがSubstanzとしての多數の精神を認容し、更にかゝる多數精神を支配するder allbeherrschende Geistを想定してゐることは明に其の嚴密なる意味に於ける獨我論と斷じ難きことを立證するものである。併しまた同時にかゝる無限なる精神——神を想定せしめるに到つた根本基調を考察し、そこに重點を置くならば、彼の思想の獨我論たる一面を肯定するや

うに考へ得られないであらうか。

さわれ周到なる用意、透徹せる理會に加ふるに豐富なる語學力のもとに全卷左の一例に見るごとき原意を傳へつゝも譯書に有り勝の拮掘晦澁の迹を絶ち讀者をして文字より受くる制約の苦痛を感ぜしめざる譯文は、附錄として添へられたる興味ある年譜とともに、哲學者として多くの反對と孤獨との裡にありつゝも尙「私自身の滿足の爲には私は王冠を戴くよりも寧ろ己が時間の主となりたい」(四三〇頁附錄年譜)と叫びつゝ讀書と思索とに沈潛したといふ百五十年前の原著者の思想をば、躍如として表現するに遺憾なきものであり、學士の所期の略々達成せられたことを確信すると同時に此難事業が索引迄具へて完全に我思想界に提供せられたことに對し、繰り返し自分は衷心より感謝し多とするものである。

Prejudices and errors of sense do from all parts discover themselves to our view; and, advancing to correct these by reason, we are insensibly drawn into uncouth paradoxes, difficulties, and inconsistencies which multiply and grow upon us as we advance in speculation, till at length, having wandered through many intricate mazes, we find ourselves just where we were, or which is worse, sit down in a forelorn Scepticism.

(右譯文)偏見や感官の誤謬が四方八方から私共の眼前に現れるそして此れ等の偏見や誤謬を理性の力で訂正しようと努力するや私共は、知らず識らず、奇怪な逆理や困難や悖理は、私共が思辨を進めて行くにつれ愈々增大生長して私共に迫り、とゞのつまり、私共は多くの込み入つた迷路を彷徨した上句の果に、自分が依然として吳下の舊阿蒙であるのを發見する。否それのみかは、更に惡くなつては、救ふに道なき懷疑論の中に陷つて了ふ。(譯書七一八頁)東京、大村書店發行。(河瀨憲次)

寄贈書籍雜誌

宗教哲學の主要問題　エルンスト・トレルチ著　佐野勝也譯　東京　大村書店

哲學とは何ぞや　ウインデルバント著　出隆譯　同

科學的理想實現新法　河本金十郎著　東京　自在社

哲學雜誌　丁酉倫理講演集　心理研究　六合雜誌　文化運動　佛教大學通信講義　學校教育　內外教育評論　教育學術界　教育界　教育研究　教育時論　東京教育　靜岡教育　岐阜教育　三重教育　長崎縣教育　鹿兒島教育　山形縣教育　日華公論　佛教學雜誌